世紀転換期ミュンヘン大学で医学学位を取得した日本人医学者

朝　治　啓　三

我が国において医学博士の学位は明治20年５月の勅令第13號「学位令」第３条に基づいて，帝国大學評議会が最終可否を判定し，文部大臣が翌明治21年に授与したことに始まる。論文提出による学位審査に基づいての医学学位の授与は明治25年，東大の菊池常三郎等３名に始まる。その後大正９年の学位令改正によって，各大学が学位を授与し得ることになった結果，学位取得希望者が激増した。彼らは順調に学位を得るために大学卒業後数年間，臨床医として働き，教授からテーマを与えられて論文を書き，教授を通して学位を申請した。結果が明瞭に出易い基礎医学的なテーマが好まれたが，それらは臨床診断のための技術や知識に直接結びつくことを目的とするというよりも，学術研究の向上を志向するテーマとなる場合もあった。医師が学位を欲した理由の一つが，学位保持者の方が社会的に有利であるという状況があったから，という考え方もある[1)]。

翻って考えてみるに，同時期にドイツの大学で医学学位を取得した日本人医学者たちが，日本の医学に対して果たした役割は何であったのだろうか[2)]。筆者は大阪府立中央図書館所蔵の住友文庫と呼ばれる一連の図書の中に，第１次大戦終了時までのドイツの大学で学位を授与された医学，工学，農学など理科系の論文が纏まって収蔵されていることを知り，その目録を作成し，刊行した。そのデータを作成する過程で，日本人医学者がベルリンやミュンヘン，ヴュルツブルクなど26の大学で医学の学位を取得していたという事実に気づいた[3)]。目録刊行後，科学研究費を得てベルリンとミュンヘンで調査を行い，それらの日本人学位取得者についての情報を得て，上記のような研究関心に基づく調査・

考察を行った。

１．ミュンヘン大学医学部で学位を取得した日本人医学者

本稿で調査対象とした医学者に関するデータは，この分野に関する先行研究者である森川潤氏が使用したものと同じく，ミュンヘン大学の学籍登録簿と学位取得者一覧である[4)]。森川氏が作成された留学生一覧表を大いに参考にさせて頂いた[5)]。森川氏は学位を取得しなかった人も含めて留学生全体を調査されたのに対して，本稿では同じ時期に学位を取得した医学生のみを対象とした。その結果，日清戦争後の1895年以降，ドイツが休戦協定に調印した1918年以前には127名の学位取得者名を確認できた。彼らの学位論文名などの詳細はミュンヘン大学図書館の OPAC で確認できる。森川氏が学位取得者として名を挙げた人物のうち，論文名が判明しなかったのは烏丸俊彦，橋本監次郎，taniguchi kiuji の３名である。それ以外の124名について，留学前，留学後の経歴，所属研究機関，医療機関，出版物，その他の業績などを，様々な先行研究[6)]やウェッブサイトを通じて調査した。ドイツでの学位取得者の中には，日本帰国後に改めて論文を提出して，日本の大学で学位を取得した医学者もかなりいたが，その論文名は国会図書館で調査した。

ミュンヘン大学への日本人医学留学生は明治13年から存在するが，学位取得者は1892年の後藤新平が最初である[7)]。日清戦争後日本からドイツへの医学留学者数が急増したのは，日本政府の対アジア「帝国主義的」政策の具体化のための準備という説明もあり得るが，当時のドイツ医学研究の進展に歩調を合わせるという学問的必要も加味しなければならないだろう。ローベルト・コッホやレントゲンの革新的研究を契機として，ドイツの諸科学は世界水準を形成しつつあった[8)]。もう一つの理由は，コレラや結核など感染性の病気の広がりを食い止めなければならない，帝国主義時代世界列強の衛生状況改善の必要である。ドイツの大学への留学者は日本だけではなく，ロシア，東欧，英，仏，伊，米など世界各国からも急増した[9)]。

日本人医学者たちが目指したドイツの大学はミュンヘン大学だけではなく，

ベルリンやライプチヒ，ヴュルツブルク，エアランゲンなどの大学においても学位は取得された[10)]。今回本稿の調査した結果から見ると，学位を目指した日本人医学生たちもミュンヘン大学だけでなく，複数の大学を訪れたのち，ミュンヘンに登録した。ペッテンコーフェル―緒方正規の師弟関係が留学者の間で重視されたのかもしれない[11)]。森林太郎もミュンヘンでペッテンコーフェルに会い，緒方の忠勤ぶりを聞かされている[12)]。

２．日本のエリート医学者たちとドイツ学位

東京あるいは京都の帝国大学を卒業して，ドイツで医学学位を取得し，帰国後，日赤病院などの医療機関に所属して要職を占めた，いわばエリート医学者といえるのは，調査した期間内では，山上兼輔だけである。彼は1892年東京帝大卒業後，明治30年（1897）日本赤十字社よりドイツ留学を命じられ，1899年にミュンヘン大学で医学学位を取得した。1901年に帰国後，日赤病院耳鼻咽喉科専任となり，自宅でも診療した。大正３年まで在職し，大日本耳鼻咽喉科会の副会頭に選ばれ，また大正５年には日本医師会理事となった。研究論文を発表し，文字通りのエリート医学者としてドイツ医学の日本への導入，定着，自立，発展に貢献したと言えよう[13)]。

山上ほどではないが，エリートに近い学歴，経歴を持つものが僅かながらいる。千葉医専出身の竹野芳次郎，浦上多門治，中川小四郎，近江湖雄三と，愛知医専出身の葛谷貞之である。千葉医専は明治34年に，高等学校から分離されて独立し官立医学専門学校となった。明治28年の「高等学校令」によって第１～５高等中学校が高等学校となり，第２条の規定によって，「高等学校は専門学科を享受するところとす但帝国大学に入学する者の為め予科を設くることを得」ることになった。その結果，「高等学校は，…実質的には法令の意図を裏切る形で，着々と帝国大学の正嫡子（予科）となっていく」。また愛知医専は，明治36年の「専門学校令」により，県立の医学専門学校となり，後に名古屋帝国大学医学部となる[14)]。言い換えれば竹野ら５名は帝国大学に準じる教育機関を卒業したと言える。

竹野は1905年に千葉医専卒業後ドイツに留学し，1905年にミュンヘンで医学学位を取得した。帰国後1913年には東京帝大大学院に所属し，15年に渋谷で開業した。それだけではない。1919年には東大で医学学位を取得した。論文も発表している[15)]。浦野は1908年に千葉医専を卒業後，新潟県立病院に勤務したのち，1912年ドイツに留学して，X 線診断，治療学を学んだ。1913年ミュンヘンで学位を取得して帰国し，14年には岡山医専の講師となる。16年に大阪回生病院レントゲン科部長となり，20年には京都帝大講師を兼ねた。22年には京都帝大で医学博士の学位を得た[16)]。中川は1909年に千葉医専を卒業し東京で医院に勤務したのち，1911年から東京帝大で外科学を学んだ。翌年新潟医専第二外科の助手となり，1913年にミュンヘン大学へ留学した。1915年に論文を提出して医学の学位を取得して帰国した。16年には東北帝大の外科に入局し助手となった。19年に講師昇任の後，20年には岡山医専の教授となった。翌年には同校附属病院の皮膚科・泌尿器科医長となり，21年には東北大学で医学学位を取得した。23年には文部省在外研究員としてヨーロッパ研修を命じられ，26年に帰国した。第２次大戦後，大阪女子医専，大阪女子大，関西医大などで教授として勤め，附属病院の院長にもなった。研究論文を発表し，研究，治療，教育に活躍した[17)]。近江湖雄三は1910年千葉医専卒業後，13年にミュンヘンで学位を取得した。翌14年には順天堂病院に勤務し，18年には東京帝大の副手になった。27年には東京帝大で医学博士学位を得た[18)]。日本で初めて無痛安産法を紹介した人として知られる[19)]。葛谷は1904年に愛知医専卒業後，愛知病院に勤務し陸軍３等軍医となる。1909年にドイツに留学しミュンヘンで学位を得た。帰国後11年には京都帝大大学院の小児科に所属し，14年に名古屋で開業した。23年には京都帝大で学位を得た。育児に関する著書がある[20)]。これらの５人は帝大出身ではないが，ドイツと日本で二重に博士学位を取得し，研究論文を発表して，研究成果を生み出すとともに，大学で後進の指導に当たり，病院で患者を診察した。医専を開業医養成機関と決めつけることはできない例である。彼らはドイツで身に着けた研究能力を日本において発揮し，中川のように２度目の海外研修に出かけて，日本医学の世界水準化に努める例もあった。学生としての一

過性の留学経験ではなく，学位取得者としての継続的社会貢献であったとみなし得る。ドイツの学の質を日本へ移植したのは彼らであった。

帰国後大学に職を得た結果，彼らのもとから次世代の医学者を生み出す条件ができた。本稿の範囲ではその結果を網羅的に示すことはできないが，浦野多門治の場合はその一例となろう。彼は明治45年に渡独し，X 線診断，治療学を学んだ。帰国後大阪回生病院でレントゲン科部長を務める傍ら，京都帝大講師を兼ねた。その時代の彼の弟子が林信夫である。林は浦野と同じく千葉医専を1919年に卒業し，1921年に京都帝大中央レントゲン室へ内地留学する。その時彼は浦野の門下に入りレントゲン学を研究した。１年半後，千葉に戻り，医専の講師を務め，その後愛知理学療法所の内科医となる。これはドイツ医学が，留学した学位取得者を通じて，日本人医学者に学として継承された例といえるであろう[21)]。

３．医師開業試験を経て学位を取得した医学者たち

エリート医学者の対極に位置するのは，医術開業試験に合格して医者になった医学者である。明治16年10月に政府は「医術開業試験規則」と「医師免許規則」を法律として公布し，翌年１月１日から施行した。「医師免許規則」では「官立及び府県立医学校」の卒業生は無試験で医師免許が与えられた。前節でみた医学者たちがこれに該当する[22)]。それ以外の者は，医術開業試験に合格すれば医師になれた。受験資格は解剖学や，外科学，臨床試験などの１年半の修学であり，年齢制限もなく，大学や医専で学ばなくても受験可能であった。合格率は10-20% 程度であったと言われる。受験者は済生学舎，成医会，日本医学校などの学校で「修学」した[23)]。本稿では上記124名のうち，同定し得た者の中から開業試験に合格してミュンヘン大学へ留学し，学位を取得した者23名を選び出して表１に示す。

彼らの留学は私費で賄われたと一般にはみなされている[24)]。しかしよく調べると，実際には地方自治体や軍などによる命令を受けて留学した者もいる。宮

田哲雄は明治33年東京市の市医となり，市からドイツ留学を命じられた。谷口弥三郎は1909年熊本医専の助教授となったとき，医専からドイツへの留学を命じられた。帰国後1915年に母校の教授に昇進した[25)]。鹿児島出身の笠茂掃部は開試合格後，1908年臺灣総督府臺北醫院に勤務していた時代に『台湾醫學會雑誌』に論文[26)]を発表し，その後ドイツへ留学して11年に学位を取得した。帰国後，旭川で開業した。彼の留学を財政面で支援したのは総督府ではないか。熊本医専は全体で８名を留学させる方針を持っていた。留学を公費私費で形式的に区別することはあまり意味がないと思われる。

23名のうち11名が帰国後，日本の東京や京都の帝国大学にあらためて論文を提出して学位を取得している。これは何を示すのか[27)]。これら11名の中には帰国後開業し，同時に大学へ所属して論文を作成した者もいるが（宮田，桜木，土井など），彼らの日本医学界での昇進を示す例は，上記の谷口以外には存在しないので，「階級上昇」の為には，ドイツでの学位取得は役に立たなかったといえるであろう。一方，彼らの中には日本での学位取得後にも研究論文を公表し続けた者もいる。（笠茂，光岡，羽太など[28)]。）そのうち羽太（はぶと）鋭治はドイツで生理学を研究し，帰国後，当時の西欧における性科学の発達に応じて，恋愛，売春，避妊，自慰などを啓蒙的に論じ，多くの性科学論文を著した[29)]。彼らに日本での学位取得を目指させた動機は，医学への貢献と言える部分もあったのではないか。谷口と宮田は，政治分野にも進出したが，その際にも優生学に基づく産児制限など医学専門家としての発言を行っている。開試合格者の中から，日本でドイツ医学を受け継ぐ医学者を育てた例を見出すことは史料不足のため困難であるが，ドイツで身に着けた学識を日本国民へ伝える点では，彼らも貢献したと言えるのではないか。

４．帰国後医学論文を上梓した医学者たち

ドイツで習得した技術や知識を世紀転換期の日本の医学界へもたらすことは，学位取得者以外の人々によっても為され得たが，当時のドイツ医学が世界水準の研究成果を生み出し得た力量や，その力量を養う教育や研究の質を日本

へ移植することは，自ら研究を体験した学位取得者によって為される他はなかったといってよいだろう。移植の媒介となるのは彼らがドイツで身に着けた研究能力を用いて，彼らが帰国後に著した学術論文や著書である。それらを公表した医学者の研究成果を表２に示す。帰国後に改めて論文を書き，日本の大学から学位を授与された医学者のうち，学位論文以外の研究業績を見出し得なかった人は表には掲載しなかった。

山上兼輔のように帝大出身者が研究論文を著したことは当然として，開業試験合格者の中にも学術論文を公表した人々もいたことは上記のとおりである。この表２にはそれら以外の人々の業績が多いことは明らかである。帝大や官立医専を卒業した人々以外にドイツで学位を取得した人のなかには，高等中学医学部出身者もいる。彼らも論文や著書を公表した。数の上で多いのは千葉，愛知，大阪，京都などの医専卒業者の研究業績である。石原泰一郎は府立大阪医学校出身で，ドイツでの学位取得後，京都帝大大学院で研究し，1921年には「人型結核桿菌」に関する論文を帝大に提出して学位を取得し，日赤大阪病院の医長となった。就職前の研究者時代に学位論文以外にも論文を発表したことからみて，ドイツでの研究成果を日本の学界に伝えたといえる。医長として臨床医学にも携わり，知識や技術をもたらした[30)]。井上喜久治は府立京都医学校を卒業後，ドイツで病理学を専攻し眼科医となった。帰国後府立京都医専の講師となり，『視力表』などを著した。彼は府立医専の伊藤元治眼科部長がドイツでの在外研究中に，部長代理を大正１年まで務めたが，その年早世した。短い生涯であったがトラホームに関する著書もあり，臨床，研究，教育においてドイツ医学の日本への移植，そしてその応用に貢献した[31)]。同様の例は長町穆（千葉醫専卒業後，千葉医専講師へ），名古屋長蔵（仙台医専卒業後，順天堂勤務）などにもみられる。

特筆すべきは高橋孝太郎の例である。1911年千葉医専卒業後，翌年陸軍軍医となった高橋は大阪砲兵工廠に勤務する中で，工場衛生に関する論文を８編，工場塵埃・衛生に関する論文を８編，そして工場塵芥の報告書１編を公表した。その後軍を辞めて農商務省嘱託となり，1921年からは呼吸ガス代謝法による労

働合理化の研究を始めた。独力で兵器工場，製鉄所，機械工場，綿紡績工場など11種の作業に従事する者の労働時の酸素消費量を測定し，静止直立時の値と比較して作業の強度を調べた。次いで製糸工場や綿紡績工場で作業台の高さ，作業者と機械との距離を変えて，立位作業と椅子作業時の労働者の酸素消費量を測定し，生産高を調べて，能率の良い作業の仕方を見出すという方法を提案した[32)]。1925年に大阪帝大から医学博士学位を授与された[33)]。労働生理学という，当時の日本では未確立の研究分野を開き，また当時の産業界のニーズにも応える能力を発揮し得たが[34)]，ドイツでは子宮がんの研究で学位を取得したので，ドイツでの研究成果をそのまま持ち込んだ訳ではない。ドイツで鍛えた研究能力を用いて，日本独特の社会的課題に独力で取り組み，成果を得たといえる。

５．ドイツでの研究指導者

ミュンヘン大学で医学学位を取得した124名の日本人を指導した，ミュンヘン大学の教授たちの研究業績は如何なるものであったのか。学位論文に指導者名が記されているものとそうでないものがあり，本稿ではその一部を示す。試みに上記の『住友文庫ドイツ医学学位論文目録』を編纂した際，学位論文実物に記されていた指導者名を一覧表にした。そのうちミュンヘン大学で学位取得し，現物が大阪府立中央図書館に所蔵されている学位論文は７名分である（笠茂掃部，川村健，小宮山権六，葛谷貞之，佐々木惟朝，佐藤忠雄，柘植宗貞）。彼らの指導教官となったミュンヘン大学の教師たちの業績の一部を表３に示した。表示したのは総数５名であるが，業績全てを示すことは紙幅の制限もあり放棄せざるを得ない。

124名の学位論文のうち指導者名が判明する事例全てを調査した結果，限られた数の指導者が多くの日本人医学者を指導したことがわかる。指導者名と指導した日本人数を述べる。Frank（1），Döderlein（32），Bauer（16），Bollinger（10），Angerer（21），Seitz（1），Klaunßner（1），Heß（2），Burst（6），Möller（2），Zumbusch（1），Herzog（2），Basedow（1），Winkel（2），

Romberg（1），Gruber（1），16人のドイツ人教官が，1895年から1918年までの間に，100名の日本人医学生を指導したことになる。32人を指導したDöderleinは専門が産婦人科であったが，それ以外の例えば外科，泌尿器科の論文をも指導したことになる。21人を指導したAngererは外科が専門であったが，耳鼻科，皮膚科の論文指導もしている。16人を指導したBauerは，衛生学，外科，皮膚科，小児科，内科などの多様な分野の論文を指導している。10人を指導したBollingerも同様に，内科，外科，眼科，泌尿器科，病理学の論文を指導している。専門性よりも対日本人適応力が所属を決めたのか。

入手し得た情報だけでは指導の内容までは判明しない。日本人医師全体としては外科と産婦人科の需要が大きかったこと，病理学や衛生学などの学位取得を目指す日本人医師の数は少なかったことが判明する。

おわりに

渡独して学位を取得しようとした日本人医学者たちの渡独動機を，帝大に進学して医師免許を得る機会を持たなかった階層の人々にとっての階級上昇の願望とみなすことは，彼らの学的貢献意思を尊重しないことになるのではないか。学位取得して帰国しても彼らが帝大教授になる例は皆無なので，階級上昇は主たる動機とは言えないことを，本稿で検討した事例が示している。彼らが英米仏ではなくドイツを目指した理由が，第2帝政期のドイツの大学が持つ学問上の水準の高さであることは，既に多くの研究者が指摘している[35)]。彼らは学問としてのドイツ医学のレヴェルの高さを認識して，自らの専門における指導者の居るミュンヘンを目指したのである。ドイツにおける医学教育も大いなる革新の最中にあり，その変化を体験した医学者もいたであろう。高度な研究が大学のほか研究所においてもなされ，人事や制度整備など国家による政策的な援助がなされている現実をも体験したであろう。これらの経験は，帰国後の彼らの医学界での実践や研究，また政界での制度作り活動に生かされ，同時に社会の工業化に伴う様々な課題を解決する活動へも彼らを向かわせたことを，124名の様々な事例から読み取り得る。国策としてのドイツ学殖の移植は立案され

たかもしれないが，実際にその移植に携わった医学者の具体的活動，特に研究者としての自立心なしには，明治・大正期国策立案者の計画も机上の空論に終わったであろう。御雇い外国人を招いて西欧の知識や技術を導入した時代が終わり，日本人が西欧に留学して教えを請う時代を経て，日本人学者による世界水準の学問形成へと向かう段階に至ろうとしていた。

注

1）井關九郎『學位大系博士氏名録』昭和６年，１－３頁。小高健『日本近代医学史』考古堂書店，2011年，245-6頁。

2）留学したという経験だけで，帰国後，自国で独自の力で医学研究をなし得たのかをあらためて考え直した結果，ドイツで学位を取得する研究活動を行ったことが，その後の世界水準の研究能力を日本へ移植することを可能にするか否かを決める要因となった，と本稿では考えている。

3）朝治啓三編『住友文庫ドイツ医学学位論文目録』全４巻，2013-2015年，関西大学大阪都市遺産研究センター。住友文庫に関する調査結果については次を参照。朝治啓三「関西大学大阪都市遺産研究センターと大阪府立中央図書館所蔵『住友文庫』」『大阪都市遺産研究』２号，23-30頁，2012年。大阪に届いた学位論文は，ドイツの大学で授与されたすべての医学学位論文を尽くしている訳ではなく，その一部に過ぎないことは，ベルリンの州立図書館書庫での調査によって判明した。しかしベルリンには所蔵されておらず，大阪にだけ所蔵されている論文もわずかながら存在する。

4）森川潤「ドイツ医学の受容過程―ミュンヘン大学留学生を中心として―」『教育学研究』第52巻，第４号，1985年。学籍登録者名については，*Amtliches Verzeichnis des Personals der Lehrer, Beamten und Studierenden an der Kgl. Bayer, Ludwig-Maximilians-Universität zu München,*（WS1854/55-WS1908/09）. 及び，*Personalstand der Ludwig-Maximilians-Universität München,*（SS1909-WS1934/35）に拠る。学位取得者については，L.Resch u. L.Buzas（hrsg.v.），*Verzeichnis der Doctoren und Dissertation der Universität Ingolstadt-Landshut-München, 1472-1970*, Bd. 2：Die medizonische Facultät 1472-1915, München, 1976. に拠る。

5）森川「ドイツ医学」，表４。

6）伊關九郎監修『學位大系博士録』，昭和15年版，発展社，や『日本醫學博士録』1954年，『日本医籍録』第２版，大正15年，『日本博士録』第１巻，1985年，教育行政研究所版，日本図書センター発行，などの経歴紹介は，簡略過ぎて多くの事実がもれている。

7）後藤は短い滞在期間中に新たな研究を行って成果を論文にしたというよりも，日本で準備してきた内容をドイツ語で論文にして提出した。森川前掲稿，13-14頁。

8）潮木守一『ドイツ近代科学をさせた官僚：影の文部大臣アルトホーフ』中公新書，1993

年，終章。宮本忍『医学思想史　II』勁草書房，1972年，843-848，989-993頁。

9）『住友文庫ドイツ医学学位論文目録』のデータ入力の際，これらの国々出身で，ベルリン大学で学位を取得した者の数が急増することに気付いた。

10）この点に関する先行研究は森川潤『明治期のドイツ留学生―ドイツ大学日本人学籍登録者の研究―』雄松堂出版，2008年，である。それによれば明治期を通して留学生延べ数683名のうち，80パーセントがドイツ・オーストリアへ赴いたという。同，１頁。森林太郎はミュンヘンで学籍登録したが，ベルリンではしていない。同16頁。

11）上村直巳『緒方正規のドイツ留学とペッテンコーファー宛書簡』熊本大学，2005年。

12）宮本忍『森鴎外の医学思想』勁草書房，1979年，38-41頁

13）田中助一「医師山上兼輔」『日本医師学雑誌』第36巻，第１号，1990年。山上兼輔「外傷性中耳膿炎ニ起因セル慢性脳腫瘍ノ一例」『大日本耳鼻咽喉科會會報』第８巻，６号８，1902年。同「原撥性懸壅垂癌腫ノ一例」『大日本耳鼻咽喉科會會報』第10巻，３号，1904年。

14）小高，62-65頁。

15）ドイツでの学位論文タイトルは，Beitrag zur Diagnose der Tuberkulose im frühen Kindrsalter，である。東大での学位論文タイトルは，「乳汁中に存するクロール，カルシウム，マグネシウム及び無機性有機性燐定量補遺」『東京大学医学部紀要』22-2である。ドイツ語論文名は Das neue Gesetz zum gesunden Heranwachsen der Kinder, 1925である。

16）瀬木嘉一「浦野多門治博士の追憶とその生涯　京大中央レントゲン室創始当時のこと」『臨床放射線』12号，1967年，金原出版。浦野の学位論文タイトルは，Ueber einen Fall von spina bifida である。日本語論文として，「一二指腸潰瘍ノ診断ニ就イテ」『岡山醫學會雑誌』35巻403号，1923年などがある。

17）新谷浩「中川小四郎先生を偲びて」『関西医科大学日本泌尿器科学会雑誌』63巻６号，1972年。ドイツでの学位論文タイトルは，Über zwei Fälle von Blasenektopie である。東北大学での学位論文タイトルは「アルコールを以てする静脈内注入麻酔法に関する実験的研究」（独文 Experimentelle Studien über die intravenöse Infusionsnarkose mittels Alkohols Mitteilung der Ergebnisse der Tierversuche）『東北実験医学会雑誌』第２巻１号。1921年。その他の論文も多い。

18）近江薫子『小さき園』1922年。ドイツでの学位論文タイトルは，Sarkom der Bauchdecken であり，東京帝大での学位論文タイトルは，「カゼインの生物学的及び血清学的研究」である。

19）高橋政秀・伊藤尚賢『妊娠より分娩まで』新橋堂，1920。

20）ドイツでの学位論文タイトルは，Der Einfluss der Säuglingssterblichkeit auf die Wertigkeit der Ueberlebenden である。京都帝大での学位論文タイトルは，「食道の吸収に関する実験的研究」である。著書として『育児宝典若き母親へ』名古屋，1915年がある。

21）瀬木嘉一「浦野多門治博士の追憶とその生涯　京大中央レントゲン室創始当時のこと」『臨床放射線』第12巻，金原出版，1967年。

22）小高，59-61頁。
23）橋本鉱市「医師集団と非学歴層」『メディア教育開発センター研究報告』67号，1994年，157-184頁。樋口照雄「明治八年から一六年までに実施された内務省医術開業試験について」『日本医学史雑誌』45巻２号，1999年。272-273頁。
24）森川，前掲論文，17頁。森川氏は「臺湾總督府や南満州鉄道が植民地経営の一環として派遣した留学生が，発展期の公費留学生の過半数を占め，しかも全員が官立医専系統の卒業生であった」と述べる。
25）荒木精之『谷口弥三郎伝』1964年，久留米。
26）「假性實扶垤里性扁桃腺炎ニ就イテ」『台湾醫學會雑誌』40号，1906年。
27）森川，17頁。ドイツでの学位取得を「私費留学生・開業医養成機関系出身者の階級上昇の願望に合致したからである」，「ドクトル学位は帰国後あらたに活動の場を開拓するために欠かせない」とみなしてよいものか。
28）笠茂掃部「北見炭鉱」，『北海道鉱業史・昭和３年版』北海道石炭工業会，1928年，367頁。光岡善雄「ベスレドガ氏『アンチウィルス』ノ胸腔局所作用ニ就イテ」『愛知医学会雑誌』35巻第６号。羽太鋭治，雑誌『性欲と人生』を創刊1921-。
29）斉藤光解説，羽太鋭治『変態性欲の研究　近代日本のセクシュアリティ　３』ゆまに書房，2006年。
30）山本美穂子「北海道帝国大学の専攻生制度について」『北海道大学文学館年報』９号，2014年。表３「京都帝国大学医科大学研究科学生の出身学校等1915～1919年」。
31）www.ophth.kpu-m.ac.jp/history/ayumi/　2016年８月26日参照
32）松藤元「高橋孝太郎と能率研究」『産業医学』第36巻第５号，1994年。同「日本の労働生理学の先駆者高橋孝太郎」『労働科学』72巻６号，1996年。高橋の著作は，『疲労と労働能率』大正13年，工政会出版部。『体力消耗より観る能率増進法』大正15年，工政会出版部。
33）国会図書館のデータでも「大阪帝国大学」と記されているが，大阪帝国大學は1931年に発足し，学位を授与したのはそれより後のことなので，1925年に高橋に学位を授与したのは，その前身である大阪醫科大學であろう。
34）「所謂東洋のマンチェスター大阪市」という言葉が論文タイトルに用いられている。『国家医学会雑誌』401号。
35）潮木守一『ドイツ近代科学を支えた官僚』中公新書，1993年。橋本鉱一前掲稿参照。服部伸「世紀転換期ドイツにおける専門職としての医師」『西洋史学』174号，1994年。宮本忍『森鴎外の医学思想』勁草書房，1979年，第２章。

（本稿は科学研究費挑戦的萌芽研究，課題番号26580126による研究成果の一部である。）

表１　開試合格後学位取得者表

氏名	費用負担	生年	学位取得年	留学前	帰国後	専門	学位論文	備考
小宮山権六	私費	1865	1898	85開試	99開業東京	内科	Über den Einfluss heisser Bäder auf den Blutdruck München : Kastner & Lossen, 1898 Extent: 11 S. ; 8" Thesis: München, Univ., Med. Diss., 1898	
佐藤忠雄	私費	1878	1903	95開試	04開業弘前	外科	Ueber die Verletzungen der Leber / Tadao Sato München : C. Wolf & Sohn, 1903 Extent: 75 S. ; 8" Thesis: München, Univ., Diss., 1903	佐藤進の養子
宮田哲雄	私費	1867	1908	済生学舎・開試	07開業東京，21医博，実験の試験及び臨床的経験によりて確定せる腹部挫傷における腸管破裂原理の知見補遺（要審，大正10.7.29官報）	外科	Ein Fall von Cystenbildung durch Verfettung eines gemischten Sarkoms ; Miyata, Tetsuo, München : Kastner & Callwey, 1906 Extent: (30 S., 2 Taf.) 8". Note: München, Med. Fak., Ref. v. Angerer, Diss. v. 20. Jan. 1908	21医博，市会議員
久保田詢じゅん	私費	1872	1908	00開試	久保田詢　明治37年1904 臺中廳臺中檢黴所檢黴醫151（中研院，文献館）。久保田詢 明治36年 1903 臺中廳臺中檢黴所 檢黴醫 161	眼科	Weitere Mitteilungen über die Behandlung von Augenkrankheiten mit der elektrischen Glühbirne ; Kubota, Gun, München : Kastner & Callwey, 1908 Extent: (36 S.) 8". Note: München, Med. Fak., Ref. Eversbusch, Diss. v. 6. März 1908	
桜木勇吉	私費	1876	1908	済生学舎06慈恵医学校・開試	福岡宗像出身，開業大阪，29医博博士論文結核病屍の脾臓の組織学的研究東京慈恵会医科大学1929-10-18	小児	Gewichtsverhältnisse von Säuglingen proletarischer Bevölkerung bei natürlicher und künstlicher Ernährung nebst einigen Bemerkungen über Säuglings-Beratungsstellen und Milchküchen ; (Mit e. Anhang üb. d. Gewichtsverhältnisse japan. Säuglinge) / Jukichi Sakuragi, München : Kastner & Callwey, 1908 Extent: (99 S.). ; 8" Thesis: München, Univ., Med. Fak., Diss., 1908	29医博
高橋祐治	私費	1870	1910	01開試	台湾総督府職員，軍医，1897．開業大阪	外科	Ueber einen Fall von Mediastinalsarkom ; Takahashi, Josuke, München : Kastner & Callwey, 1908 Extent: 40 S. 8". Note: München, Med. Diss. v. 14. Mai 1910, Ref. v. Bauer	

内山好十 うちやまこうじゅう	私費	1872	1910	02開試	02開業東京浅草	小児	Ueber Viskositätsbestimmungen der Milch und der gebräuchlichsten Säuglingsnahrungen ; Uchiyama, Koju, pr. Arzt ; Aus d. Säuglings-Beratungsstelle und -Milchküche München-Westend. Leitender Arzt: Uffenheimer München : Kastner & Callwey, 1909 Extent: 38 S. 8". Note: München, Med. Diss. v. 16. März 1910, Ref. v. Bauer	
土井衛	私費	1877	1910	99熊本医学校、開試	11開業愛媛，大阪，21医博	産婦	Ueber die Folgen des vor-und frühzeitigen Blasensprunges bei einer normalen Geburt,Doi, Mamoru ,Verl.-Ort, Verlag, Jahr: München, Kastner & Callwey, 1910, 27 S.	21医博
笠茂掃部 かさもかもん	私費	1881	1911	06慈恵医学校・開試	開業・旭川	?外科	Pathologische und spontane Frakturen ; Kasamo, (Kamon) München: Kastner & Callwey, 1910 Extent: 90 S. 8". Note: München, Med. Diss. v. 29. April 1911, Ref. v. Angerer Kasamo Kamon 笠茂掃部 Ort Kagoshima Daten 13.8.1881– Text SS 1910–WS 1910/11 Medizin (Chirurgie)–U München, Maistr. 29/3; Waltherstr. 30/2 l. Dr. med. 1911, München: Pathologische und spontane Frakturen. 90 S.Arzt in Asahikawa.	
長谷川基 もとい	私費	1875	1911	98開試	開業北海道	?	Für die Syphilis-Behandlung mit Salvarsan München : Gässler, 1911 Extent: 18 S. 8". Note: München, Med. Diss. v. 20. Dez. 1911, Ref. v. Bauer "	
深瀬周吉	私費	1872	1912	95開試	12開業東京	産婦	Ein Fall von Dystokie durch ein Cervixmyom München : Kastner & Callwey, 1911 Extent: 46 S. 8". Note: München, Med. Diss. v. 20. April 1912, Ref. Döderlein Fukase Shûkichi 深瀬周吉 Ort Yamagata-ken Daten 18.10.1872– Text Okt. 1909–März 1912 Medizin SS 1910–WS 1911/12 Gynekologie – U München, Maistr. 8/3 l. und 25/3; Waltherstr. 22/2.Dr. med. 1912, München: Ein Fall von Dystokie durch ein Cervixmyom.46 S.Gynekologe, Direktor des Hibiya-Hospitals in Tôkyô.	

箕浦光雄	私費	1876	1912	89済生学舎・開試	開業大阪，23医博，軟部における関節及び関節間軟骨の移植の研究（フランクフルト病理学雑誌15-3，1914	外科	Ein Beitrag zur Kenntnis der Missbildungen an den Extremitäten ; Minoura, Mitsuo, München: Wolf, 1910 Extent: 79 S. 8". Note: München, Med. Diss. v. 30. Jan. 1912, Ref. Döderlein Minoura Mitsuo 箕浦光雄 Ort Tsu, Mie-ken Daten 4.4.1876– Text WS 1910/11–SS 1913 Medizin（Chirurgie）– U München, Kobellstr. 8/0.Dr. med. 1912, München: Ein Beitrag zur Kenntnis der Missbildungen an den Extremitäten. 79 S.Arzt in Ôsaka.	23医博
赤塚虎之助	私費	1878	1912	03開試/	開業大阪/末梢リンパ内エステラーゼに関する研究　赤塚虎之助，京都帝国大学医学博士1946-09-03	外科	Ueber Osteogenesis imperfecta congenita ; Akatsuka, Tranosuke, Medizinalprakt. München : Wolf, 1911 Extent: 24 S., 2 Taf. 8". Note: München, Med. Diss. v. 17. April 1912, Ref. Döderlein	46医博
井上馨	私費	1877	1912	98開試	開業埼玉	産婦	Ueber die Dauer der menschlichen Schwangerschaft nach dem Conceptionstage berechnet ; Inouye, Kawaru, appr. Arzt ; Aus d. Frauenkl. zu München München : Kastner & Callwey, 1911 Extent: 20 S. 8". Note: München, Med. Diss. v. 18. März 1912, Ref. Döderlein	
平野友作	私費	1879	1912	00済生学舎・開試	13開業三重，23医博，胸廓及肺臓外科に関する実験的研究（日本外科学会雑誌18-2）	?	Ueber einen Fall von Hypernephrom ; Hirano, Tomosaku, München : Kastner & Callwey, 1912 Extent: 42 S. 8". Note: München, Med. Diss. v. 17. Aug. 1912, Ref. Döderlein Hirano Tomosaku 平野友作 Ort Mie-ken Daten 29.10.1879–24.7.1933 Text 1911–1913 Medizin（Chirurgie） WS 1911/12–SS 1912 – U München, Pettenkoferstr. 24/1 WS 1912/13–SS 1913 – U Bonn.Dr. med. 1912, München: Über einen Fall von Hypernephrom. 42 S. Stellvertretender Direktor des Hazu-Hospitals in Mie.	23医博
光岡善雄	私費	1890	1912	?日本医学校・開試	14開業岐阜，28医博/胸腔局所免疫に関する実験的研究 光岡善雄，愛知県医科大学医学博士1928-01-23	産婦	Ein Fall von extremem Blutverlust bei Tubenruptur mit nachfolgender Psychose; zugleich über Psychosen nach gynäkologischen Operationen; Mitsuoka, Z(ensichi), appr. Arzt/ München: Kastner & Callwey, 1912 Extent: 31 S. 8". Note: München, Med. Diss. v. 3. Aug. 1912, Ref. Döderlein	28医博
岡田久雄	私費	1872	1913	97開試	病院勤務東京	内科	Pseudoleukämie oder Morbus Banti? ; Okada, Hisao,München : Kastner & Callwey, 1912 Extent: 59 S. 8". Note: München, Med. Diss. v. 27. Febr. 1913, Ref. v. Bauer	

谷口弥三郎	私費	1883	1913	02熊本医学校・開試	14京都帝大大学院，15熊本医専教授，23開業，47参院議員	産婦	Ueber den extraperitonealen Kaiserschnitt, besonders seine Technik und Indikationsstellung ; Taniguchi, Yasaburo, appr. Arzt a. Kumamoto ; Aus d. Univ.-Frauenkl. München/ München : Müller & Steinicke, 1913 Extent: 46 S. 8". Note: München, Med. Diss. v. 10. Juni 1913, Ref. Döderlein	医博，参院議員
羽太鋭治	私費	1880	1913	済生学舎、00開試、故郷で開業、	13開業東京，21医博 京大，精嚢の年齢的変化に就いて（順天堂醫事研究会雑誌541別冊，要審，大正9.5.4）	泌尿器	Ureter- und Blasenverletzungen bei Uteruscarcinom-Operationen ; Habuto, Eijl, pr. Arzt/ Uteruskarzinomoperationen/München : Kastner & Callwey, 1913 Extent: 51 S. 8". Note: München, Med. Diss. v. 3. Juni 1913, Ref. Döderlein	21医博，14年神田小川町に泌尿生殖器科医院を開業。
岡田日人ひのと	私費	1877	1914	01慈恵医学校・開試	開業兵庫，28医博/異なれる条件の下に白米病に罹患せしめたる鳩体内に於けるヴイタミンB含有量に就て 岡田日人，大阪帝国大学 医博1928-05-14	産婦	Ueber einen Fall von Placenta marginata ; Okada, Hinoto/Aus d. Münchener Univ.-Frauenkl. München : Müller & Steinicke, 1913 Extent: 16 S. 8". Note: München, Med. Diss. v. 23. Juni 1914, Ref. Döderlein	28医博
丸尾弁治べんじ	私費	1875	1914	95開試	15開業静岡	眼科	Ueber die Bedeutung des Glykogens in der Augenpathologie/München : Kastner & Callwey, 1913 Extent: 14 S. 8".Note: München, Med. Diss. v. 9. Febr. 1914, Ref. v. Heß Maruo Benji 丸尾弁治 Ort Shizuoka Daten 15.3.1875– Text SS 1913–WS 1913/14 Medizin (Augenheilkunde)–U München, Pettenkoferstr. 9/2; Reisingerstr. 8.Dr. med. 1914, München: Über die Bedeutung des Glykogens in der Augenpathologie. 14 S.Arzt in Shizuoka.	
渡辺正雄	私費	1885	1914	05開試	23開業神戸。医博（京大）健常眼房水のチフス桿菌に対する特異性殺菌作用について（日本微生物学会雑誌15）	産婦	Ausgedehnte, partielle Blase[n]mole mit lebendem Achtmonatskinde ; Watanabe, Masao, Arzt a. Mie <Japan>München : Kastner & Callwey, 1913 Extent: 30 S. 8". Note: München, Med. Diss. v. 6. Mai 1914, Ref. Döderlein	医博
斉藤格かく	私費	1975	1914	95開試	開業福島	眼科	Ueber die Histogenese der traumatischen Iriszyste ; Saito, Kaku, a. Wakamatsu/München : Kastner & Callwey, 1914 Extent: 14 S. 8". Note: München, Med. Diss. v. 14. Aug. 1914, Ref. v. Heß	

表 2　ミュンヘン帰国後研究業績

氏名	生年	学位取得年	留学前	帰国後	研究業績等
吉田坦蔵たんぞう	1875	1908	99三高中学医学部卒　兵庫縣美方郡大庭村	10台湾総督府医専教授。22開業台北,	日治臺灣醫療公衛五十年（修訂版）：張秀蓉　編註-2015-17）吉田坦蔵 江景勤「マラリア及び12指腸虫患者の血糖量について」195，6号。マラリア患者の血糖に就いて（続）207号.「アメーバ赤痢のエメチン療法」138号。吉田坦蔵：メニエール氏病ニ就テ．台湾医会誌No.5 p.6-24，明治35年（1902）吉田坦蔵：ムニィェール病ニ就テ．岡山医学会誌No.156，p.11-18，明治36年(1903)吉田坦蔵：メニエール氏病ニ就テ．東京医事新誌No.1291，p.162-165；No.1292，p.204-212，明治36年(1903) 「内科診断学」井上善次郎，吉田坦蔵，吐鳳堂書店，1916，759頁
岩野俊治	1878	1912	03岡山医専卒	岩野俊治明治三十九年1906專賣局檢定課囑託56頁(台湾文献館) 12南満医学堂教授。22医博・満州医大教授，岩野俊治（奉天南満医大）=動物体内における抱合性Gucurn酸の形成について.	犬瘟熱ノ病原報告」岩野 俊治，細菌學雜誌 1907(145)，821-828，1907,「アドレナリン」注射及膵臓摘出ガ肝臓及筋肉ニ及ボス影響ニ就テ，岩野俊治/p216～228．京都医学雑誌．14(6)
大和良作	1880	1913	00五高中学医学部卒	14満州鉄道大連病院医局員，21医博，開業，京都，異性抗体の試験に及ぼす影響について並当該異性受体の血清化学的集性に関する知見補遺(京都医学会雑誌16-80)	片側腎臓ヲ剔出スルモ遺残腎臓ニ何等ノ影響ヲ及ボサヾルヤ，大和 良作，日本泌尿器病學會雜誌 Vol.9(1920-1921) No.3

山上兼輔 かねすけ	1862	1899	92帝大医大卒	開業東京	外傷性中耳膿炎ニ起因セル慢性腦膿瘍ノ一例,本會例會演説附圖參照 大日本耳鼻咽喉科會會報 Vol. 8(1902) No. 6-8 原發性懸壅垂癌腫ノ一例, 山上 兼輔, 大日本耳鼻咽喉科會會報 Vol. 10(1904) No. 3
井崎貞一郎	1866	1905	89高等中学校学医学部卒	開業大阪	井崎貞一郎, 山口久四郎 編[他]黴菌学. 第1虎列刺病篇, 朝香屋書店, 明26.10 井崎 貞一郎報告:官報第2747号 第2748号,明治25年8 月23 日-24 日発行. 薬史学雑誌24(2), 139- 1-49 (1-89), 小山鷹二,「ツベルクリン事始め」p.148. 井崎貞一郎報告：官報第2747号第2748号. 明治25年8月23日-24日発行. 東京衛成病院略報第一号:官報第2361号, . 明治24年5月16日発行. 24)東京衛戍病院略報第二号：官報第2390号, 明治24年6月19日発行.
松野鉉吉 げんきち	?	1909	98県立愛知学高卒	34医博, 腫瘍移植実験に就て, 名古屋医科大学, 1934-01-15	腫瘍移植実験に就て—松野鉉吉[著]1934,松野鉉吉;縦隔竇腫瘍ノ二例, グレンツヂビート, 第4年第5號,昭和5年6月,
竹中繁次郎	1876	1905	94四高中学医学部卒	07開業東京, 21医博	1914年5月1日「一肺ヲ摘出セル後他殘肺ニ呈ハル, 肉眼的顯微鏡的所見ニ就テ」1914年 6月1日.「一肺ヲ摘出セル後他殘肺ニ呈ハル, 肉眼的顯微鏡的所見ニ就テ(承前)」1916年4月1日「古賀氏液療法ハ化學療法ニ非ラス」1916年6月1日「結核菌ノ發育ヲ制止スル藥品ノ研究：(附)酒石酸加里銅, 青酸加里金及「メチユレン青ノ生理的作用」1916年3月1日.「青酸加里銅鹽ハ果シテ結核菌發育ヲ制限スル力アリヤ」.タケナカ, ハンジロウ「結核病と社会問題」呼吸器科院, 1908.8.肺出血の學理及び療法/竹中繁次郎著. 東京：結核雑誌社, 1927.9.
長井岩雄	1854	1905	?	?	「我子の成長：一名・育児日記」. 長井, 岩雄。出版社長井岩雄1913. 小兒の食物に就て/長井, 岩雄—フレーベル會, 1908-2,「育児のしをり」
家坂清次郎	1869 (66)	1905	93一高中学校医学部卒	開業新潟・東京	1897(明治30年)家坂清次郎. ヂフテリー後の調節機麻痺. (北越醫學會雜誌. 104號.) 家坂清次郎 (傳染病に伴はれる眼症に就て(上)日本醫科大學眼科教室醫學博士 中村康)
田村六三郎	1871	1905	93一高中学校医学部卒	07開業千葉, 市医師会長	田村六三郎 著；三輪徳寛 閲, 外科鑑別診断学, 明文館, 明40。下痔及横痃・近世医学叢書；第27編, 南江堂, 明43.7。斎津村誌 田村六三郎, 昭和4。

飯盛益太郎	1866	1907	87四高中学校医学部卒	07開業石川	ノートケナル（述飯盛 益太郎（譯）：石炭酸龍腦 他9項金澤醫學會雜誌24，1891年10月，飯盛 益太郎：「ピオクタニン」ヲ鼻咽喉病ニ用フ 他8項，金澤醫學會雜誌26，1891年12月。飯盛 益太郎：「アクストル」ノ皮膚病ニ於ケル効用他2項，金澤醫學會雜誌 13，1890年10月。飯盛 益太郎：友田氏「ガーゼ」ノ製法，金澤醫學會雜誌20，1891年5月15日。飯盛 益太郎：慢性下痢ノ療法 他6項，金澤醫學會雜誌15，Dec-1890。
久保田詢じゅん	1872	1908	00開試	久保田詢 明治37年1904 臺中廳臺中檢黴所 檢黴醫151（中研院，文献館）。久保田詢 明治36年1903 臺中廳臺中檢黴所 檢黴醫 161	輓近眼科治療法。東京：南江堂，明42．9，1909。
石原泰一郎	1879	1908	98府立大阪医学校卒	10京都帝大大学院，21医博，日赤大阪医長，開業，人型結核菌に対する鶏の感受性並其の原因的研究（日本微生物学会雑誌10，要審対象0.8.24）	結核ノ胎盤性遺傳ニ就テ（其ノ二）石原 泰一郎 日本微生物學會雜誌 Vol.8（1918）No.1 人型結核桿菌ニ對スル鶏ノ感受性并ニ其原因的研究 石原 泰一郎1）1）京都醫科大學微生物學教室 日本微生物學會雜誌 Vol. 10（1918）No. 1 P 515-592
戸塚隆三郎たつさぶろう	1877	1908	00一高中学校医学部卒	09陸軍医学校教官，20一等軍医，21医博，開業，工業上使用の鉱油及びテレビン油に関する皮膚疾患通称油負の研究（皮膚科及び泌尿器科雑誌17-5）	戸塚 隆三郎，「本邦男子尿道口ノ大サニ就テ」日本泌尿器病學會雜誌Vol. 7（1918）No. 2，明治 44 年戸塚隆三郎 56）は「摂護腺癌に就いて」という論文を発表した。これは戸塚がウイン,アルゲマイネ・ポリクリーニック泌尿器科フリッシュ教授のもとに留学し,5 例の摂護腺癌を経験したことから,その概略を述べたのである。泌尿器外科第二十五巻第三号-377 頁。　「軍隊に於ける花柳病」大阪医学会席上 陸軍三等軍医正 戸塚隆三郎氏談，大阪毎日新聞1916.6.21（大正5）。戸塚隆三郎「ネオサルバルサン注射後ニ発起セル稍々高度ナル砒疹ノ一例」（「東京医事新誌」（第1801号）より）1913年1月11日東京医事新誌局。可溶性沃度有機抱合体（「エスヨヂン」）ノ治淋剤トシテノ価値，千葉医学専門学校雑誌，no.89 page.93-103（1917-02-15）

淵田俊治	1879	1908	03医専卒	開業大阪 1908年，淵田 俊治，	催乳注射薬ラクチフェリンの奏效せる一症例/淵田俊治/p25～26（0001.jp2）治療薬報（243）1925-09 三共。松尾展成，「ザクセン滞在日本人改訂稿」，岡山大学経済学会雑誌43(3)，2011，49～71，
井上喜久治	?	1908	02府立京都医学校卒	府立京都医専講師，12死去	タイトル トラホーム一席話 著者 井上喜久治 著 出版者 弘文社 出版年月日明44.10
高橋養助ようすけ	1878	1910	02一高中学医学部卒	開業東京	生殖圖解と性交論澤田順次郎,高橋養助,佐藤啓吾著有文堂,1914脊髄銃創ノ生殖泌尿器ニ及ボス關係ニ就テ順天堂医学Vol. T4（1915）No. 514-515 順天堂醫事研究会雑誌 p.751-757
中村富治	1877	1909	02一高中学医学部卒	20開業東京	結核性淋巴腺腫―(瘰癧)/p1293～1302医事新聞.（646）。結節性紅班Srythema nojasüiニ就テ，Pertenece a: CURATOR：Chiba University's Repository for Access To Outcomes from Research Descripción: Autor(es): 中村，富治 00193455＊title：千葉醫學會雜誌＊issue:56・57＊s page:44＊e page:52＊date of issue：1903-07
田上清貞	1876	1910	99四高中学校医学部卒	開業富山，32医博/死体内に於ける血液細胞の変化 田上清貞，金沢医科大学（旧制)医学博士1932-01-25	田上清貞 生年1876年 田上清貞論文集　　田上清貞: 家兎死体心臓血液中に於ける赤血球の変化. 十全会誌. 36（昭6）．死体内に於ける血液細胞の変化，十全会雑誌，35，7，1213，1930.
松久裕馬ゆうま	1879	1914	06官立金沢医専卒	開業岐阜	十全会雑誌，62号，1911年。金沢医専，Dr.Y. Matsuhisa, Waltherstrasse, 25-1, Muenchen.
高梨繁之助	1875	1910	02官立千葉医専卒	開業千葉	「アルサミノール」（日本製サルワルサン）ノ臨床的治療/高梨繁之助/千葉医学専門学校校友会雑誌(79)9-1916-04。 日本医事新報.（399)說苑『日本醫界刷新聯盟起る』を讀みて/高梨繁之助/p26～26 醫學中央雜誌=Japana centra revuo medicina.（242)下痢ノ截除療法、該療法ニ依リ横痃ノ防止/高梨繁之助/599

葛谷貞之	1880	1910	04県立愛知医専卒	11京都帝大大学院，14開業名古屋，23医博食道の吸収に関する実験的研究葛谷，貞之クズヤ，サダユキ京都帝国大学医学博士1923-12-10	葛谷貞之，愛知醫學會雜誌．第30巻 第3號． 「口蓋扁桃腺ニ現ハル，脂肪及類脂肪」（第三回報告） 『育児宝典若き母親へ』名古屋1915
竹野芳次郎	1875	1911	05官立千葉医専卒	13東京帝大大学院，15開業，19医博。乳汁中に存するクロール，カルシウム，マグネシウム及び無機性有機性燐定量補遺（東大医学部紀要22-2）	Publik. u.a. Kodomo wo jôbu ni suru shinikujihô 子供を丈夫にする新育児法（Das neue Gesetz zum gesunden Heranwachsen der Kinder, 1925）． 新聞記事文庫 食料問題（6-161） 中外商業新報 1929.11.27（昭和4） 栄養を増進させる食物の緊縮方法 フレッチャリズムを勧める 竹野芳次郎博士談
日野信次	1878	1911	03官立金沢医専卒	開業香川	座右新医海 ― -1918/1/1春秋堂書店 稀有ナル「ペスト」患者手術ノ記 十全會雜誌 1915年11月1日
笠茂掃部 かさもかもん	1881	1911	06慈恵医学校・開試	開業旭川	假性實扶垤里性扁挑腺炎ニ就テ/笠茂掃部/台湾医学会雑誌（40）1906-01 p613～620
瀬木本雄 せぎもとお	1874	1911	07県立愛知医学校卒	開業名古屋，25医博，毛染薬（白髪染）の目に及ぼす影響について（日本眼科学会雑誌26-13）	瀬木本雄 好生館医事研究会第四回総会 初生児結膜出血ニ就テ（「中外医事新報」（第625号，明治39年4月5日発行）より）1906年4月5日中外医事新報社 瀬木本雄，毛染薬（白髪染）ノ有害作用ニ就テ．日本眼科學會雜誌 26巻 11號 瀬木本雄：日本眼科学会雑誌，26：11；1065，大11
長町穆 あつし	1884	1912	07官立千葉医専卒	14官立千葉医専講師，22医博，23開業東京，臓器域幾その毒性特に心臓及腸に対する作用に就いて（独文）（京都帝大医学部紀要3-4）	ラヂウム療法 長町穆 著 鳳鳴堂書店 昭和8 長町，穆 急性出血性貧血ニ対スル「アラビアゴム」液ノ効果ニ就テノ研究 千葉醫學專門學校雜誌 no.143 page.173-192（1922-06-15）

松永茂助もすけ	1882	1911	05官立千葉医専卒	11開業静岡，27医博/内分泌に関係ある二三臓器の淋巴管に関する研究 松永茂助，東京帝国大学醫学博士1929-06-13	内分泌に関係ある二三臓器の淋巴管に関する研究　松永 茂助　東京帝国大学　医学博士1929-06-13　　腹部マッサージーノ血壓ニ及ボス影響ニ就テ/松永茂助/p9～52　静岡県医学会会報(32)19120010　　内分泌ニ關係アル二三臓器ノ淋巴管ニ關スル研究/松永茂助/解剖学雑誌1(2)19280020 p213～243（0045.jp2）
箕浦光雄	1876	1912	89済生学舎・開試	開業大阪，23医博，軟部における関節及び関節間軟骨の移植の研究（フランクフルト病理学雑誌15-3，1914）	箕浦光雄,悪性腫瘍ニ於クル白血球増多ニ就テ.醫事新聞，732號.シユナイデルリン氏ノ斯古剝拉密涅—莫爾比涅麻醉ニ於ケル實驗ニ就テ/箕浦光雄/p1～56 京都医学雑誌4(1)1907-01 箕浦光雄，日本外科學會雑誌，第18回，第5號，箕浦光雄，炎症性自血球増多ノ化膿二封スル診断的慣値．日．本外科學會二丁，第18回，第5號　醫理學新論 緒方正清撰　岡本直澂・松本需一郎・水口耕治・箕浦光雄共著　大正五（1921）東京　吐鳳堂書店
赤塚虎之助	1878	1912	03開試/	末梢リンパ内エステラーゼに関する研究　赤塚虎之助 アカツカ，トラノスケ京都帝国大学医学博士1946-09-03	赤塚虎之助,日本眼科學會雑誌,第十八巻
岡田久雄	1872	1913	97開試	病院勤務東京	醫政今昔譚/岡田久男/日本医師会雑誌33(2)1955-01 p107～112（0030.jp2）
柘植宗貞	1871	1912	92三高中学医学部卒	12開業三重	炭坑衞生書/ドクトル・ストルペル原著；柘植宗貞識明治37[1904]]
名古屋長蔵	1886	1912	92官立仙台医専卒	12順天堂勤務，22医博，開業東京，溶血性補体に関する研究ことに補体各成分の代償能力について（独文）（要審，大正11,8,4）	多産亡国論 名古屋 長蔵（著）万里閣，1931. Operabilität des Uteruscarcinoms: die Ursache der späten Inanspruchnahme des Arztes 著者Chozo Nagoya 出版社 Kastner & Callwey, 1912

平野友作	1879	1912	00済生学舎・開試	13開業三重，23医博，胸廓及肺臓外科に関する実験的研究（日本外科学会雑誌18-2）	胃壁内翻ヲ伴ヒタル胃有莖筋腫及ビ同腫瘍切除後續發シタル小腸捻轉ノ手術的治驗/平野友作/522 中外医事新報（867）日本医史学会，日本医史学会 [編]1916-05　平野友作：胸肋1民外填塞ニヨル肺臓座縮法ノ動物1'1'.験的研究，日本外科壊合雑誌，第18，第2，56頁，大正7' 平野友作，胃壁内線ニ伴ヒタル胃有玄筋腫及ビ同腫蕩切除後緩愛シタル小腸捻韓ノ手術的治験．中外密事新聞，大正5年，867号，22頁.
光岡善雄	1890	1912	?日本医学校・開試	14開業岐阜，28医博/胸腔局所免疫に関する実験的研究 光岡善雄，愛知県医科大学医学博士1928-01-23	胸腔局所免疫に関する実験的研究 光岡 善雄　愛知県医科大学 医学博士学位授与1928-01-23　光岡善雄，愛知醫學會雜誌．三十五巻，第六號.光岡善雄，イスレドカ氏Lアンチグイノレス，胸腔局所作用＝就テ．愛知瞥感曾雑誌第三十五巻第六披.
吉永端三	1886	1912	06私立熊本医専卒	22医博（京大），両棲動物における血管細胞の起源について（独文）（京都帝大医学部紀要3-3）（要審大正12，5，7）	腎臓実質除去ノ最大限度竝ニ除去後ニ起ル諸般ノ変化 日本泌尿器病學會雑誌 日本泌尿器病學會雑誌 8（2），110-111，1919-06 社団法人日本泌尿器科学会　吉永端三，東京醫事新誌，第2003號，大正5年. 吉永端三，京都醫學雑誌，第13巻，第3號，第13次總會演説抄
片平重次	?	1913	11官立仙台医専卒	病院勤務，29医博（九大），プロテオゾーマの知見補遺（台湾醫學會雑誌292，293）	医療法人帰陽会　片平重次，高山欽哉，松村利雄，辻　裕，坂本光治，平井昭典　腹壁小切開直診法（第三報）（主として16mmカラー映画による胃粘膜像の動的所見に就て）日本消化器病学会総会　（1960）　蛇毒殊に台湾産主要蛇毒の注射によりて発現する家兎血液像の変化について，台湾医学会誌，266，昭和12年 　再ビ「モノアミノ」酸屬ノ「ヂアスターゼ」催進作用ニ就テ附、「味ノ素」ノ澱粉消化作用ニ及ス影響ニ就テ　氏原均一，片平 重次　一過性肺陰影に続発したギラン-バレー症候群、日本医事新報 日本医事新報（1717），1957-03 日本医事新報社 蛇毒殊ニ臺灣產主要毒蛇ノ毒素注射ニ因リテ發現スル家兎血像ノ變化ニ就テ/片平重次著　臺北市：臺灣總督府中央研究所衛生部，昭和2[1927]臺灣總督府中央研究所衛生部報告；業績第70號
谷口弥三郎	1883	1913	02熊本医学校・開試	14京都帝大大学院，15熊本医専教授，23開業，47参院議員	妊娠悪阻及其療法1919谷口弥三郎

羽太鋭治	1880	1913	済生学舎，00開試，故郷で開業，1914年神田小川町に泌尿生殖器科医院を開業。	13開業東京，21医博京大，精嚢の年齢的変化に就いて（順天堂醫事研究会 雑 誌541別 冊，要審，大正9.5.4）	1920年『性慾と人生』を創刊（-1921年），多くの通俗性科学書を著した。『変態性欲の研究 近代日本のセクシュアリティ 3』ゆまに書房 2006，斉藤光の解説） 本郷にいづま医院内で活動。1928年暮れ，医師法違反で取り調べを受け，前年の脳溢血，神経衰弱での苦悩，自殺をはかり，死去した。
松本貞二郎	?	1913	?	開業大阪	喉頭病學ニ就テ　松本 貞二郎　耳鼻咽喉科雑誌 Vol. 1（1893 - 1895）No. 1 p.9-18 耳茸之實驗　松本 貞二郎　同　P40-48 歐氏管ニ「ブーシー」用法　松本 貞二郎　耳鼻咽喉科雑誌 Vol. 1（1893-1895）No. 3 P164-178
唐沢準吉	1881	1914	03府立京都医専卒	病院勤務満州	唐沢準吉：左乳腺に同時に発生せる結核及癌について,南満医学会誌，6：42-44，1919.
高橋孝太郎	?1886	1914	11官立千葉医専卒	病院勤務東京、25医博.エネルギー代謝試験よりする本邦工場作業の研究,高橋孝太郎,大阪帝国大学，医学博士,1925-07-14	国家医学会 国家医学雑誌404号 論説・工場衛生に関する調査七題　第七・某兵器大工場職工二百名と兵士百に於ける尿中の窒素量を比較論し職工の生活状況推定に及ぶ（承前）高橋孝太郎・国家医学会 国家医学雑誌406号 論説・工場衛生に関する調査七題追加　第八・余の求めし体力消耗率〈仮称〉より体重及び年齢を基準となし工（名）種を選定せんとす（高橋孝太郎），国家医学会 国家医学雑誌405号 論説・工場衛生調査七題（完）　第六・某兵器大工場内電話送話口の細菌数に就いて（附）送話口より結核菌を発見せし六例（高橋孝太郎・清水清三郎），国家医学会 国家医学雑誌403号 論説・工場衛生に関する調査七題　第七・某兵器大工場職工二百名と兵士百名に於ける尿中の窒素量を比較論及し職工の生活状況推定に及ぶ（高橋孝太郎・清水清三郎），国家医学会 国家医学雑誌402号 論説・工場衛生に関する調査七題　第五・某兵器大工場手（機）鍛工の肺気量に就いて（高橋孝太郎・清水清三郎），国家医学会 国家医学雑誌401号 論説・工場衛生に関する調査七題　第四・所謂東洋のマンチェスター大阪市上下層気流中の炭酸瓦斯に就いて（完）高橋孝太郎・清水・国家医学会 国家医学雑誌399号 論説・工場衛生に関する調査七題　第三・某兵器大工場大作業三カ年間の統計上に現われたる肺結核患者発生率と作業塵埃との関係に就いて（完）高橋孝太郎・清水清二郎，国家医学会 国家医学雑誌396号論説・工場衛生に関する調査七題・第一　其兵器工場に於ける昼夜作業の身神に及ぼす影響に就いて（高橋孝太郎）

武田元一郎	?	1914	05府立東京医専卒	開業，25医博 Beitrage zur histologischen Kenntnis des Nervus trigeminus，三叉神経の組織学的補遺，武田元一郎タケダ,ゲンイチロウ京都帝国大学医博1925-07-14	武田元一郎; 日耳鼻 30: 74, 1924. 田中氏痩削性鼻炎手術式ノ一變法ニ就テ、武田 元一郎、大日本耳鼻咽喉科會會報 Vol. 29(1923 - 1924) No. 1
松尾峰太郎	1874	1914	95一高中学医学部卒	15開業、東京	新竹地方に於ける肺ジストマ症について、台湾医学会誌71,612、明治41；肺ジストマ症について、同、90、793、明治43；新竹地方本島人における内臓寄生虫の統計的検査成績,同114.115、382、45年。「応用家庭医学」,羽太鋭治 編近代文芸社、昭和4第二篇 人體之解剖及生理 日本橋病院副院長 ドクトルメヂチーネ 松尾峯太郎 松尾峰太郎、横川定，1912，頁382-387(按：原頁數383-387重覆)。松尾峰太郎當時擔任新竹廳衛生顧問，他向新竹廳長提出有關瘧疾與內臟寄生蟲的報告見《臺灣總督府公文類纂》，冊號5450，文號3，頁25-38。(以寄生蟲病做為二十世紀臺灣環境變遷的一項指標：初步探討,劉翠溶、劉士永、顧雅文)(臺北：中央研究院、聯經出版公司，2008)，頁523-590。
大野正孝	1880	1914	03府立京都医専卒	25医 博、Beitrage zur Physiologie des menschlichen Blutes、大野，正孝、京都府立医科大学，医 学 博 士，1925-07-25	諸症候に對する類症鑑別診斷/大野正孝/47日本鍼灸雑誌(262) [17]1926 (12)
近藤寛次郎	1877	1915	98三高中学医学部卒	14開業大連	自己血液筋肉内注射ノ喘息，蕁麻疹及ビ腦溢血等ニ對スル治驗例（第1回報告）近藤寛次郎 / 近藤弘 岡山医学会雑誌 巻53 号 4,1941-04-30. 自 己 血 液 注 射 療 法 ノ 治 驗 例 Erfahrungen mit Eigenblutbehandlung（第2回報告)近藤寛次郎 / 近藤弘 岡山医学会雑誌 巻54 号11, 1942-11-30

佐藤小五郎	1877	1914	05県立愛知医専卒	15開業京城，溶血性補体の研究，佐藤小五郎，京都帝国大学，医学博士1928-05-14	ちふす桿菌ニヨル家兎免疫血清中ノ補體各成分ノ觀察:溶血性補體ノ研究特ニ補體各成分ニ就テ（第4回報告）佐藤 小五郎日本微生物學病理學雜誌 22(3)，357-376，1928/これら菌ニヨル家兎免疫血清中ノ補體各成分ノ觀察:溶血性補體ノ研究特ニ補體各成分ニ就テ（第5回報告）日本微生物學病理學雜誌22(3)，377-394，1928/赤痢桿菌ニヨル家兎免疫血清中ノ補體各成分ノ觀察:溶血性補體ノ研究特ニ補體各成分ニ就テ（第6回報告）日本微生物學病理學雜誌22(3)，395-416，1928/横紋筋（骨骼筋）ノ特異性ニ就テ:宿題「臓器特異性ニ際スル研究」實驗成績其二十三，横紋筋ニ就テ 日本微生物學病理學雜誌 22(10)，239-248，1928/
塚本政治 まさじ	1886	1914	09県立金沢医専卒	15開業高山	塚本政治，悪性「ヂフテリー」．兒科雜誌．第328號．昭和二年九月（會）．
内田賢助	?	1915	12府立京都医専卒	29医 博/尿 毒 症 に 於ける脳の病理解剖学的研究（独文）内田賢助，東北帝国大学医学博士1929-01-26	尿毒症に於ける脳の病理解剖学的研究（独文)内田 賢助ウチダ，ケンスケ東北帝国大学医学博士1929-01-26
中川小四郎	1887	1915	09官立千葉医専卒	16東北帝大講師，20官立岡山医専教授，21医 博，（ 東北帝大）アルコールを以てする静脈内注入麻酔法に関する実験的研究（独文）東北実験医学会雑誌	臨床泌尿器科診断学　1924　中川小四郎　バーンス氏「ソリウム」液ニ依ル「ピエログラフィー」ニ就テ 臨床泌尿器科診断学　1924 中川小四郎/村松，篤治：岡山医学会雑誌 巻：33 号：373 発行日：1921-02-28

表 3　ミュンヘン大学医学位論文指導者名

学位取得者	学位論文	指導者論文
笠茂掃部	Pathologische und spontane Frakturen (FachMedLese)	Die Chirurgie in Einzeldarstellungen/hrsg. von Rudolf Grashey Atlas typischer Röntgenbilder vom normalen Menschen : ausgewählt und erklärt nach chirurgisch-praktischen Gesichtspunkten, mit Berücksichtigung der Varietäten und Fehlerquellen, sowie der Aufnahmetechnik / von Rudolf Grashey Author: Grashey, Rudolf, 1876-1950 Edition: 2., bedeutend erw. Aufl. Veröffentlichungsangabe: München : Lehmann, 1912 Extent: XII, 214 S. : Ill., graph. Darst. ; 8° Series: Lehmanns medizinische Atlanten. - München : Lehmann, 1903- ; Röntgenuntersuchung bei Kriegsverletzten/von Rud. Grashey. Author: Grashey, Rudolf, 1876-1950 Veröffentlichungsangabe: München : Lehmann, 1918 Extent: 204 S. Zur Statistik der Brustdrüsengeschwülste: Zusammenstellung der an der Klinik des Herrn Geheimrat Professor Dr. von Angerer zu München vom Mai 1899 bis Dezember 1903 inkl. beobachteten 131 Brustdrüsengeschwülste. Diss. Kgl. Hofbuchdruckerei Kastner & Callwey, 1906
川村健	Bericht über 66 operierte Nabelhernien (FML)	von Angerer.
小宮山権六	Ueber den Einfluss heisser Bäder auf den Blutdruck	不明
葛谷貞之	Der Einfluss der Säuglingssterblichkeit auf die Wertigkeit der Ueberlebenden (FML)	Pauli, Carl. "Das Ichthyol und seine Präparate in therapeutischer Hinsicht." DMW-Deutsche Medizinische Wochenschrift 14.43 (1888): 892-893. Die Verbreitung der Echinococcen-Krankheit in Vorpommern/von Erich Peiper
佐々木惟朝	Ueber Brüche des Tibia-Kopfes	Die strafrechtliche Verantwortlichkeit des Arztes Author/Editor: Angerer, Ottmar von Place of publication, Publisher, Year: München, Lehmann, 1899 Physical Details: 20 S. Die neue chirurgische Klinik in München Author/Editor: Angerer, Ottmar von Place of publication, Publisher, Year: München, Rieger, 1892 Physical Details: 30 Bl. : Die chirurgische Klinik im Julius-Hospitale zu Würzburg unter Direction des Herrn … Von Linhart vom Februar 1875 bis Juli 1876 Ein Beitr. zur Wundbehandlung Author/Editor: Angerer, Ottmar von Place of publication, Publisher, Year: Würzburg, Staudinger, 1876"

佐藤忠雄	Ueber die Verletzungen der Leber (BayStaBib)	不明
柘植宗貞	Dermoid-Kystom von einem abgesprengten dritten Ovarium ausgehend (FML)	Die japanischen Seeigel / Döderlein, Ludwig Heinrich Philipp Author: Döderlein, Ludwig, 1855-1936 Veröffentlichungsangabe: Stuttgart : E. Schweizerbart'sche Verlagsh., 1887 Extent: 59 p, [11] leaves of plates : ill. ; 33 cm. Translation of title: Reproduction: [Mikrofiche-Ausg.] Collective title: Western Books on Asia : Japan ;